流離
昭和四十年六月十五日第一版発行
昭和四十九年三月四日新装第一版発行

著者　石川達三
発行者　高橋直良
発行所　冬樹社
東京都千代田区神田神保町二―一八
電話東京二六四―〇三四六
振替東京七七五七
印刷所　三容堂印刷株式会社
製本所　三和製本株式会社
© Tatsuzo Ishikawa
0093-10109-5190

流離

石川達三

冬樹社

流離

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

石川達三自選集

目次

雪の宿　11
鳳青華　33
深海魚　53
流離　87
蓮女抄　121
一家創立　137
風雪　165
蔦葛　231
虹と蝸牛の室　261
あんどれの母　279
盲目の思想　293

装画　山口威一郎

流離

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

雪の宿

駅からは三里の道、それが四尺近い雪に降り埋められて、沿道の疎らな農家は雪に押し潰されたやうに低く見えた。綿雪は行く先も見透せないほどに降り乱れて速力が出せなかった。運転手は幾度か扉を開いては深い雪の中に足を抜きながら、前面の硝子を白く塗り潰した雪を手袋で拭った。早い黄昏が車内を暗くしてゐるのにルームランプも工合が悪くて灯らないので、化粧の濃い女の顔は白い花のやうに大きく匂ひやかに揺れてゐるのだ。運転手が頭に白髪とも見える雪をのせて入って来たのを見ると彼女は膝に抱いた子を外套で一層大切に包んでやった。

「東京も雪が降りまして？」

「暮に少し、二寸ばかり降っただけ」

「暖くていいのね。五年ほど前に、春、遊びに行きましたわ」
「寄ればよかったのに」
「あら、住所も知らせないでおいて。今度行ったら寄らせて頂くわ。奥さんは？」
吉川はうす闇の中で淡く笑ひ、インバネスの袖の下になってゐた白い四角な包みを、袖をはねて見せた。
「何ですの、それ」
「女房ですよ」
「あら！」
彼女は屹として男の表情を凝視したが、吉川は又しても白く塗り潰されて来る前面の硝子を見守りながら肩を揺られてゐた。妻は妊娠したままで死に、骨壺は一人であると同時に二人でもある。そして孤独になった男は十年遠ざかって居た故郷に帰って来て、その昔の女と同じ車に乗り合はして了ったのだ。生れ故郷の温泉町に居られなくなって東京に出たのも、まき子が吉川の心を怨んで自殺未遂事件を起した為であった。いまでは男も彼自身の道を歩みまき子も子を連れた母である。十年前の怨みは消えたのであらうか、妻の骨箱とその良人の顔色とを見比べているまき子の表情はむしろ同情の柔い愁ひをたたへてゐるのだ。これが生きている妻と連れ立って帰って来たものならばまき子は復讐を考へたかも知れない。彼女は全く縁も無い男をここに感じてゐた。昔の恋愛事件も怨みの数々も遠い幻に過ぎなくて、その頃からこの人とは何のかかはりもなかったやうに思ひ、安心して子供の寝顔をさしのぞいて見るのであった。

「この辺の道、覚えてゐます？」
「さあ、川の手前だね。忘れたな」
「さう」と女は笑ったが、忘れてはゐない表情をはっきりと男の顔の上に読んだ。月の夜、霧の夕べ、幾度か彷徨した樅林が今は雪が積んで木立も低かった。
「宿へおつきになるの？」
「ええ」
「どこ？　美山館？」
「望翠楼と云ふのがあったでせう」
女は急に顔を伏せた。笑ったやうであった。
「何です？　望翠楼に何かあるんですか」
今度は声に出して笑ひ、悪戯めいて言った。
「わたし、いま、あすこに居るのよ」
「あすことは、望翠楼？」
「ええ、私がやってるの。変れば変るもんでせう」
「それはいかん。では他へ泊らう」
「あら、逃げるの？　大丈夫よ。迷惑なんかしないからお泊りなさいよ。かうなれば商売ですもの。行届いたお世話もしてよ」
男は愕きと狼狽とを笑ひにまぎらして、どれ、と子供に手を出し、自分の膝に抱き取ると、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com